



©Makoto Kamiya



©Yuji Ueno

角田鋼亮音楽監督就任記念 第203回定期演奏会「新しい音色」

2024年4月27日(土)13:45開場 14:30開演 [14:10～指揮者プレトーク]

愛知県芸術劇場コンサートホール

指揮／角田鋼亮 (音楽監督) ピアノ／務川慧悟*

ヨハン・シュトラウスⅡ世：皇帝円舞曲 Op.437

ベートーヴェン：ヴァイオリン協奏曲 ニ長調 Op.61 (ピアノ編曲版) *

ブラームス (シェーンベルク編)：ピアノ四重奏曲第1番 ト短調 Op.25 (管弦楽版)

満場のお客様とともに、ここ三井住友海上しらかわホールでの定期演奏会もいよいよ最後となりました。この素晴らしい空間の記憶、その永い余韻を胸に…次回の第203回定期演奏会(4月27日)からは、愛知県芸術劇場コンサートホールを新たな活動の地としてまいります。さらに(ご承知の通り)、我らがマエストロ角田鋼亮が音楽監督に就任。オーケストラは新たな時代を迎えます!

もっと豊かに、もっと深く——新時代の幕開け、2024年度定期の年間プログラムには、《新しい景色、新しい音世界》というテーマが据えられました。その初回にはもちろん角田音楽監督が登場。新しい季節にふさわしい華やかなワルツを冒頭に、地元・愛知出身の素晴らしいピアニスト・務川慧悟さんをお迎えした協奏曲(これがまた《新しい景色》にふさわしい選曲!)、そして2023年度の定期を通してじっくり追究してきたテーマ作曲家・ブラームスの音世界をさらに先へ…という、練りに練られたプログラムです。

◆《皇帝円舞曲》で華やかに開幕!——ブラームスも愛した〈ワルツ王〉の優美

〈角田鋼亮音楽監督就任記念〉定期演奏会の幕開けを飾るのは、ワルツ王としておなじみ・ヨハン・シュトラウス2世(1825～1899)の《皇帝円舞曲》Op.437(1889年)です。いまや「円舞曲(=ワルツ)」という邦訳も曲名でしか使わなくなりましたが、男女が抱き合うように手を組み合いながら、円を描くように踊るための曲……ということが直に伝わる、いい訳語ですね。

ウィンナ・ワルツの全盛時代を築いた彼は、自身の楽団と共にワルツ・ブームで楽都ウィーンを熱狂させただけでなく、ヨーロッパ各地で盛んに演奏活動を展開。《美しく青きドナウ》《ウィーンの森の物語》《春の声》と、代表作のタイトルを並べるだけでメロディが浮かんでくる…まさにワルツ王です。

彼が、ベルリンの〈王様の館〉なるコンサートホールの新装開館を祝うために書いたのが、この《皇帝円舞曲》です。初演時は《手に手を取り合って》というタイトルだったそうで、そのあたりの経緯など、総譜『ヨハン・シュトラウス 皇帝円舞曲／春の声(ソプラノ独唱版)』[音楽之友社／2018年]にある関根裕子さんの解説が分かりやすく詳しいのでぜひ。

かのブラームスも、親しいヨハン・シュトラウス2世の音楽を好んでいたそうで、そのブラームスが《皇帝円舞曲》を聴いていくわく、「管弦楽法がすばらしいんで、見事に鳴るんだ。しかし結局、魅力の秘密なんて考えてもしょうがないよ」(ハイベルガー、リヒャルト・フェリンガー／天崎浩二編訳、関根裕子共訳『ブラームス回想録集2 ブラームスは語る』[音楽之友社／2004年])。

さらに(先の総譜解説にも譜例つきでご紹介があるように)、この《皇帝円舞曲》の第2ワルツのメロディは、ブラームスの弦楽四重奏曲第1番(1873年初演)第2楽章のテーマと似ていたり…と、今季のブラームス・シリーズをお聴きの皆さまなら、なるほど…と微笑まれることでしょう。

◆ベートーヴェン愛好家も目をみはる——傑作〈ヴァイオリン協奏曲〉のピアノ版(!)

続いてお聴きいただくのは、ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン(1770～1827)の傑作〈ヴァイオリン協奏曲 ニ長調〉Op.61(1806年初演)を、作曲家自身がピアノ協奏曲に編曲したヴァージョン(!)です。

テインパニの静かでシンプルな連打からはじまるこの曲……ヴァイオリン独奏に溢れる伸びやかなメロディの美しさといい、堂々たるスケールの全曲には瑞々しくも確かな力がみなぎり、風格と生命力の昇華……といった趣。古今の〈3大ヴァイオリン協奏曲〉を挙げるなら、外れることはないでしょう。

そんな〈ヴァイオリン協奏曲〉から、独奏パートをピアノに置き換えた編曲版がつくられたのは1807年のこと。これは、イギリスで楽譜出版社を経営していた作曲家クレメンティからの依頼によるものです。——当時、イギリスではヴァイオリン協奏曲をピアノ用に編作して演奏することが盛んだったそうで(大崎滋生『ベートーヴェン像再構築』[春秋社／2018年]参照)、海の

向こうの流行に応えてつくられた編曲、というわけです。

ヴァイオリンでは限られた和音しか弾けませんが、ピアノは両手10本の指でさらに多くの音を出すことができますから、当然ながら原曲の独奏パートへ大幅に加筆されています。——ベートーヴェンが何を補って、どんな響きに創り直したのか……原曲をご存知のかたほど「あっ！」と新鮮に感じられる箇所も多いはずです。

なかでも、ピアノが独奏でその華麗な腕前を披露する〈カデンツァ〉という部分。この時代の協奏曲ではおおむねソリストに任せられていたので、この曲でも絵譜では略されているのですが、別途ベートーヴェン自身による長大なカデンツァが残されています。これがなんと、ピアノ独奏だけでなくティンパニの助奏が入る（！）という奇抜なもの。作曲当时、フランス軍のウイーン占領をはじめ軍楽の響きも身近だったせいか、楽界では軍楽の行進曲風リズムもちょっと流行っていたそうで……協奏曲冒頭のティンパニによる導入とも関連していたりと、深く考え出すとまた面白いところ。

ちなみに、児島新『ベートーヴェン研究』〔春秋社／1985年〕には、著者が新ベートーヴェン全集でこの協奏曲の楽譜校訂をおこなった際、自筆譜など各種資料のインクなど精査を重ねて創作・編曲の過程を明らかにした、その研究成果をまとめた論考も収録されて面白いですし、大宮眞琴、谷村晃、前田昭雄監修『鳴り響く思想 現代のベートーヴェン像』〔東京書籍／1994年〕に収められたヘルムート・マーリングの論考「ヴァイオリン協奏曲をめぐって」も、作品の成立から異稿・編曲について、受容史や演奏習慣など詳しく扱われています。ご興味あるかたはぜひ。

◆世紀を超えるブラームス——〈ピアノ四重奏曲第1番〉オーケストラ版の喜び！

最後にお聴きいただくのは、2023年度の定期演奏会を通して味わい尽くしてきた作曲家、ヨハネス・ブラームス（1833～1897）。彼が青年期に書いた室内楽曲の傑作〈ピアノ四重奏曲 第1番 ト短調〉Op.25（1861年初演）のオーケストラ編曲版です。

原曲は、ピアノとヴァイオリン、ヴィオラ、チェロという四重奏。青春の憂愁を歌いこめ、ときに朗らかな詩情を満たし、終楽章の〈ツイゴイネル風ロンド〉にはハンガリーのロマ音楽を思わせる熱狂的な昂揚を爆発させ……楽曲構成にも工夫を凝らした力作です。

これを、3管編成の大オーケストラ曲へと転生させたのは、20世紀の作曲家アルノルト・シェーンベルク（1874～1951）です。——ウイーン生まれの彼は、調性感をなくした〈無調〉の音楽や〈十二音技法〉を開拓して先鋭的な作曲活動を展開。現代の新しい音楽へと大きく扉をひらいた作曲家でした。

そんなシェーンベルクですが、〈古典を学ぶ〉ことの大切さをつねづね説いていましたし、とりわけ先人ブラームスを敬愛していました。「革新主義者ブラームス」という長大な論文（シェーンベルク／上田昭訳『シェーンベルク音楽論選 様式と思想』〔筑摩書房（ちくま学芸文庫）／2019年〕所収）では、ときに保守的と思われるがちなブラームスだが、実はその作曲技法には豊かな革新性がある……と熱く論じているほど。

その敬愛が音になったのが、この〈ピアノ四重奏曲 第1番 ト短調〉オーケストラ編曲版（1937年）です。

——編曲にあたってシェーンベルクは、「私はブラームスのこの曲を愛していますが、なかなか演奏されません。しかも、優れたピアニストが演奏するとピアノばかり強調されて弦楽が聴こえず、かえって良くない演奏になってしまいます。私は、すべてのパートが聴こえるように編曲しました」と述べていますが……まあこのオーケストラ版の凄いこと。ブラームスの原曲にある色彩感や響きの陰翳など、細やかな表現を大管弦樂へと拡大強化したようなサウンドは、原曲を知らずとも十分に楽しめるものになっています。

シェーンベルクご本人は、ブラームスが生きていたら書いていたであろう書法で編曲した……などとうそぶいていますが、終楽章で鉄琴・木琴・小太鼓など、およそブラームスが使わなさそうな打楽器群が大活躍した派手なサウンドが繰り広げられたり、卓抜な楽器法は20世紀の作曲家ならではのもの。しかし、その〈翻訳〉を通して、シェーンベルクが原曲に見出した〈ブラームスの革新性〉がはっきりと浮かび上がる仕掛けになっているあたり、たいへん面白い編曲なのです。

マエストロ角田＆セントラル愛知響がお届けしてきたブラームス・シリーズ、その集大成でも番外編でもあると同時に、来季のテーマ《新しい景色、新しい音世界》を幕開けるにふさわしい選曲ではありませんか。では次回、愛知県芸術劇場コンサートホールでお会いしましょう！

やま の たけひろ
山野雄大

ライター〔音楽・舞踊評論〕。『音楽の友』『バンドジャーナル』など雑誌・新聞への寄稿をはじめ、NHK・FM「オペラ・ファンタスティカ」他ラジオ出演も。第一生命ホールでのコンサートシリーズ「雄大と行く 昼の音楽さんぽ」ナビゲーターを務めたほか、CD解説、オーケストラやバレエ公演の解説、歌詞対訳など多数。朝日カルチャーセンター新宿教室でバレエ音楽講座を開講中。

Profile

